

## 「浮浪者」像の形成と展開——横山源之助を中心に

### 一 近代都市と「浮浪者」<sup>1)</sup>

近代人は、「勤勉」「自立」を生活倫理とする。ゆえに「懶惰」「依存」は、負の徳目となる。これに、「清潔」／「不潔」、「秩序」／「乱雑」等の価値対立が続く。事情は、近代都市の下層社会も同じであった。明治期に、都市は、貧民窟を下層社会の外部に置いた。「資本家と相対する<sup>きみくら</sup>卿等の事は同じく日本国民と称せられながら、しかも人数の上より言へは遥に多数を占めつゝありながら一般社会の外に置かれ『下層社会』の名目の下に冷蔑せられつゝあるにあらずや」（ルビは原文、指示しない限り、以下同じ）（横山、二巻、五一）<sup>2)</sup>。下層社会の最下層には、「乞食」がいた。「乞食」は、あらゆる負の徳目を背負わされた。「乞児は実に掬摸、窃盗さては強盗の雛児なりけり。乞食の宿る処は実に社会的<sup>ほかに</sup>黴菌の培育所なりけり。乞食の素性は憫むべき乞食の将来は悪むべき恐るべしというべきのみ」（著者不詳、一八九六、一〇六）。近代初期のヨーロッパで、「労働能力のある者が乞食をすることは、怠惰として罪悪であるばかりか、使徒の語に照らしても、隣人愛に反することがらであった」（Weber, 1905=1962: 188）。事情は、日本でも同じであった。広島で部落問題の解決に尽力した自由民権論者の前田三遊も、乞食を指し、「其身に纏ふた襤褸は、心までもそれであることを、象徴してゐるのではないか、彼等は多く心まで出来損なつてゐる」（傍点は原文、指示しない限り、以下同じ）（藝備日日新聞<sup>3)</sup>、大正六年一月三〇日）と書いた。

本稿は、近代日本の「浮浪者」・乞食像について考察する。「浮浪者」とはだれか。まずは、「雑役夫、立坊、乞食、屑俵拾ひ、行燈担ぎ」（ルビは引用者）（東京市社会局、一九二三（一）、一九九）等で糊口を凌ぎ、路上で寝起きする人々として。「乞食」は「浮浪者」の仕事の一つである。世の人々は、「浮浪者」を、労働を厭い、他人に縋って路上を徘徊する「出来損ない」と考えた。「浮浪者」が糊口を凌ぐ営みを、仕事と見做さなかった。では、都市下層社会のルポルタージュ（以下ルポ）や研究は、「浮浪者」をどう見ていたのか。それは、「勤勉」「自立」の規範力や、世の人々の眼差しから自由であったのか。これが本稿の問いである。本稿は、横山源之助（以下横山）を中心に、都市下層社会研究にみる「浮浪者」像について考察する。そしてそれが、近現代の都市研究において意味するものを問う。

本稿の構成は、次のとおりである。まず、おもに東京市（当時）の資料（『東京市社会局調査報告書』）に依り、近代都市の「浮浪者」像についてみる（二節）。「浮浪者」は、明治初期より社会の周縁者であった。行政・警察も、同様に「浮浪者」を眼差した。次に、横山の著作をテキストに、彼の職人・貧困像を俯瞰し、そこでの「浮浪者」像について考察する（三節）。なぜ横山なのか。横山は、都市下層社会の実態を系統的にルポした最初の人である。また横山は、都市下層社会の構造を実証的に分析した最初の人である<sup>4)</sup>。本稿は、横山を、明治～大正の移行期にあって、近代の眼差しで都市下層社会を見た最初の人と見做す。社会の近代化に伴い、その後、近代の眼差しが社会全体を覆っていく。

横山の著作に、「浮浪者」に言及した文章は少ない。それでもそこに、横山の「浮浪者」像が浮き彫りになる。横山も、下層社会認識のなかで「浮浪者」を周縁化した。次に、近代の「浮浪者」像が、戦後の都市下層社会研究へ継承されたことをみる（四節）。同時に、明治～大正期より、「浮浪者」像を反転するルポと研究があったことをみる。「浮浪者」を客体化する視座と主体化する視座。本稿は、都市下層社会のルポと研究を、これら二つの視座が拮抗し、交錯する関係のなかで捉える。最後に、本稿は、「浮浪者」研究（批判）が、近現代都市の排除を可視化し、その排除に加担した都市研究の偏りを補填する、全体的な都市研究の堡壘をなすことを指摘する（五節）。

## 二 都市下層社会と「浮浪者」像

### （一）眼差しの近代化

横山は、貧民や労働者への熱情と冷徹な観察眼を持ち、日本各地の下層社会を訪れて、精力的に調査し、ルポを書いた。「其之を探求するや、躬<sup>みづから</sup>貧窟に入りて貧民と伍し、寝食を共にし労働を分つ。故に其筆唯事實を過たざるのみならず、其文自然に労働者貧民に同情を有す」（島田三郎）（横山、別巻一、序、一二）。横山の『日本之下層社会』は、一八九五～九八年に行われた東京の貧民窟・木賃宿街調査、桐生・足利の機業地労働調査、富山の自営農・小作人調査、関西の燐寸工場・綿糸工場調査、東京の鉄工所調査を基に、新聞・雑誌の記事と書下しを入れ、九九年に刊行された。時は、日清・日露戦争の狭間で、日本が産業革命を経て、機械・軍需工業が発達し、領土の海外膨張が始まった頃であった。農村では、寄生地主制のもと小作争議が頻発し、困窮化した小作人が都市へ流れていた。都市では、伝統的職人層が解体し、雇用（労働）者（徒弟や職工）になり、飢餓賃金に喘いで、同盟罷工が頻発していた。都市空間も変容していた。下層社会の景観は、辻裏の溜り場・貧民窟から共同長屋・木賃宿街に変貌していた。その住人は、旧幕以来の貧民（職人や小商人、雑芸人等の雑業層<sup>5)</sup>）から新たな貧民（日雇いや職工等の雇用層）へ交替していた。「今日もワラジ稼業である日稼人足が大多数を占めてゐるのは依然として（日清戦役前と一引用者）変わらないが、工場附属の人足が著しく増殖して来た」（横山、四巻、三九八～三九九）。

このような下層社会は、数々のルポで描かれた<sup>6)</sup>。ルポは、下層社会に集積した貧民の労働・生活を活写し、資本主義の構造矛盾を読者に暴いた。西田長寿「東京府下貧民の真況」（一八八六年）は最初の不況期に、桜田文吾の『貧天地饑寒窟探検記』（一八九〇年）、松原岩五郎の『最暗黒之東京』（一八九三年）は、最初の恐慌期に書かれた。そして、日清戦争後の、工業・軍需産業の発達期に書かれたのが、『日本之下層社会』であった。それは、（横山も執筆した）『職事情』（農商務省商工局編、一九〇三年）以後の下層社会調査を先導するものであった。一九～二〇世紀の下層社会ルポの叙述様式には、次のような変化があった。「①踏査から観察へ ②貧民窟全体の叙述から特定地区・主題からの叙述へ ③下層社会の位置づけが外部から内部へ ④驚きから観察結果の提示の仕方に工夫へ ⑤同情から社会批判へ ⑥（著者が一引用者）無名から本名へ」（中川、一九

九四、三〇六)。このような変化の背景には、産業化・近代化のなか「下層社会が、異質な外部にではなく、一般社会との関連で位置づけ始められた」(中川、一九九四、二九五)事情があった。つまりそれは、都市の近代化に照応する眼差しの近代化であった。

横山は、下層社会の変容を詳細に記述した。そこには、明確な方法的な問題意識があった。(横山の下層社会への関心を喚起した)『最暗黒之東京』以前の著作には、記述の方法についての自覚はなかった。「横山源之助は松原岩五郎のルポに学びつつ、やがて松原のスラム・ルポの限界をのりこえ、明治期下層全域にわたるルポルタージュを完成していく」(立花、二〇一五、四一)。横山は、観察・聞き取りのデータと統計資料を併用し、下層社会を実証的・体系的に記述した。下層社会は、貧民や職人の世界を労働組織、賃金、労働条件、雇用関係、生計、救済、教育、労働・生活慣行等の、統一した項目に沿って整然と記述された。『日本之下層社会』冒頭の例言では、使用する資料の妥当性、下層社会調査の経緯・条件が明示された。本文では、資料の出所が逐一明示された。このような方法的手順は、近代の実証科学のものである。「吾国において近代的意味の社会調査が行はれはじめたのは資本主義の漸く爛熟せる明治三〇年以後である。即ち横山源之助氏が東京の細民地区の生活状況を調査して明治三十一年に『日本の下層社会』なる著書を刊行したのが恐らく最初であろうと思われる」(戸田、一九三三、三九～四〇)。横山には、近代科学の精神が備わっていた。その横山が、「浮浪者」をどう見たのか。これが本稿の関心である。

## (二)「浮浪者」調査と施策

明治～大正期に、「浮浪者」も変容した。筆者は、大正期広島『藝備日日新聞』『中國新聞』<sup>7)</sup>に登場する「乞食」の記事を分析し、そこに、近世の系譜を引く(俄の)藝人、僧侶、行商、巡禮等からなる「伝統型乞食」と、解雇(失業)者、病氣・負傷の失職者、無職者、家族解体した人々(子どもや女性、老人)等からなる「近代型乞食」を区別した(青木、二〇一〇、三六)。都市下層民が階層分化し、集住空間が分解した大正期は、「乞食」にとって近代型への転換期であった。事情は、横山がいた東京(市)も、同じであった。産業都市東京では、その転換が一層劇的だったと思われる。「特に日露戦争以来は、地方の流民にして軍夫募集の風説に惑はされ上京せるもの多かりしより、流れ～～て無料宿泊所に来るもの頗る多となり」(傍点は引用者)(横山、四巻、二五)。時代はやや下るが、東京市社会局の「浮浪者」調査によれば、都市貧民が「浮浪者」になる直前の職業(直前職)は、一九二五年に、雑業・白傭人夫六七人、商業(店員、行商)四一人 雑種(紙屑拾ひ、小使掃除夫他)二九人 運輸業(車力、人力車夫他)二七人 金属職人一九人、その他・不詳一九〇人であった(計四七三人)(東京市社会局、一九二九、二一七)。一九三七年に、白傭人夫八五人、農業四九人、無職(失業)二四人、食堂使用人一三人、商店員九人、車夫馬丁八人、官公街雇傭員七人、菓子屋店員六人、鍛冶職六人 その他・不詳二二人であった(計二二九人)(東京市社会局、一九三九、六八～六九)。一九二五年と三七年で、「浮浪者」の数え方も直前職の分類も異なるため、単純な比較はできないが、いずれも「近代型乞食」が多く、明確に雇用者であった人(傍

点)の比率は、一九二五年が四四・〇パーセント、三七年が六二・九パーセントと、近代型へ傾斜している。

大正期、下層民の大半は、生活が向上し、次第に都市内部へ包摂された。これに対して「浮浪者」は、外部に据え置かれた。そもそも「浮浪者」は、幕末～近代にいつもいた。東京市は、「浮浪者」を「一定の住居又は生業なくして諸方を徘徊するもの」(警察處罰犯に関する處罰令第一條の三 一九〇八年改訂)(東京市社會局、一九二三(二)、二七二)となし、明治初期より「浮浪者」調査を行った。『東京市社會局調査報告書』に登場する「浮浪者」及び関連の人数を拾うと、表の通りである。表から、次のことが指摘される。まず、東京市は、明治初期より(一般)貧民と「浮浪者」を区別していた。次に、年度により「浮浪者」の定義・数え方の違いはあるが、概して「浮浪者」は増加傾向にある。さらに後の昭和期でも、「財界の不況と産業の委縮は無産者の大東京に集中するものが尠ならず、剩さへ勞力の過剰は數多の失業者を出し、斯る失業者の中には困憊の果てが野宿をなすまでに落魄した者が多い」(東京市社會局、一九三九、一九)。一九三七年に「浮浪者」が減ったが、それも、「野宿をなすが如き者は季節の關係と、警察當局の取締方法と、個性の缺陷による落伍者の増加など特殊の關係と事情から増減し又は集散するのであつて必ずしも減少の途を辿るものとは断定出來ない」(傍点は引用者)(東京市社會局、一九三九、一九)。「浮浪者」数は、社会の經濟状態、及び警察による取締りの厳格さの函数である。

表. 東京市の「浮浪者」数(人)

	300	同上東京市15區
1921(大10)	8,695	警察處分者
1922(大11)	253	
1923(大12)	1,124	行旅病人數
	1,587	行旅死亡人數
1924(大13)	281	市勢調査
1925(大14)	380	國勢調査 東京市15區
1928(昭3)	473	
	2,158	養育院収容者數
1930(昭5)	1,799	國勢調査 東京市15區
1931(昭6)	1,953	
1935(昭10)	1,117	東京府
	963	東京市15區
1937(昭12)	363	特定地區
1883-1921	36,275	39施設へ収容の行旅病人數
	930	同上年平均

『東京市社會局調査報告書』1卷18-19頁

7卷189頁, 13卷51頁, 21卷176-177頁, 35卷27頁

行政は、貧民と「浮浪者」を区別したが、そこには、次のような(政治的な)事情があった(青木、二〇一〇、四六～四八)。一つ、政府は、明治四年に戸籍法(壬申戸籍)を定めた。そして、幕末～明治初期に流動した流民を統制し、無籍者を取り締まった<sup>8)</sup>。無籍者には「浮浪者」も含まれた。それは、

流民を実家の戸籍に入れ、税と兵役を課す国民にするためであった。二つ、行政は、公共空間（道路）の管理を行った。それは、都市景観を近代化し、治安を維持し、疫病の伝染を防ぐためであった。東京市は、一八七二年に知事の訓令及び違式註違條例を、〇八年に、それを改定した警察犯處罰令を布達した。それらは、今日の軽犯罪法に相当し、条項の大半は道路交通の規制、公共空間の管理規則であった。そして、「一定の住所なく又は生業なくして諸方を徘徊する」ことを「浮浪罪」となし、警察は、度々「浮浪者」を取り締った。東京市での最初の取締りは、一八七〇年である。「明治三年外國貴賓の渡來さるゝあり、此際東京市内に多数乞食浮浪の徒の俳諧するは、首都の體裁上より觀るも面白からずとなし、乞食浮浪の徒約三百人を狩集め、之れを一時的に収容した」（東京市社會局、一九二三（二）、二五九／一九二九、一七三）。「浮浪者」の内、「重輕症の罹病者」を「永久的救濟施設」の養育院に収容し、「健康者」を「徒らに公費に依る救養のみに頼らしむべきものにあらず、須らく自立の途に就かしむべきの必要あり」として、「請負者」に預けて、就労させた。このような取締りと、施設収容／就労自立の「浮浪者」対策は、その後も踏襲された（そして、今日に至っている）。

### 三 横山の「浮浪者」像

#### （一）下層社会像

##### 職人像

横山は、都市の工業化の中で、貧民がますます困窮化する様を憂え、貧民救済の方途を求めた。横山の関心は、中でも職人にあった。工業化は、職人層の階層分化を進め、職人全体を没落させた。「誰か言ふ職人社会は日清戦役後生活は昂上せりと、一方には文明は日に駸々として進みつゝあるにも拘らず、労働は器械の為に侵略せられ居る傍ら旧来より存する職人社会は、年々生活は窮迫を致し、其の組織は解体し居るなり」（横山、別巻一、七七）。日清戦争は、職人の困窮に拍車をかけた。横山は、「今戦争（日清戦争—引用者）の為に最も影響の多い職業を挙げれば」（横山、三巻、四四〇）と、諸々の職人を列挙した。そして、困窮する職人を救済するため、四つの方策を考えた。一つ、調査研究により、職人の仕事と生活の実態を解明すること。そこに、実証主義者の横山がいた。二つ、調査研究の結果を以て、職人と貧民の困窮を社会問題化すること。そこに、ルポライターの横山がいた。三つ、職人困窮の社会問題化の先には、労働運動があった。横山は、一八九七年、片山潜等と労働組合期成会を組織し、機関誌『労働世界』に職人困窮のルポを書き、労働問題の喧伝に努めた（立花、一九八一、九六、九八）。そこに、労働運動家の横山がいた<sup>9)</sup>。四つ、横山は、海外殖民（朝鮮、満州、南米）に職人（及び貧民）の困窮脱出の方途を求めた<sup>10)</sup>。「近年喜ぶべき一種の潮流は日本の社会に現はれてきた。其れは我国の中流爲社会以下の民人の間に、海外渡航者の増加して来た一事で有る」（横山、八巻、五六）。そこに、国民主義者の横山がいた。

他方で、横山は、職人困窮の原因は、職人の旧来の俗風（労働慣習）にあると考えた。その点に関しては、資本家による職人批判に賛同した。「我が労働者を見れば成程懶惰なりと言うも不規則なりと

言うも其れに相違なかるべし」(横山、二巻、五三)。そして職人が、工業世界へ積極的に適応し、その技倆の向上を図ることを求めた。横山は、伝統の職人氣質に沿った倫理の向上を求めた。そこに、懶惰と不規則を嫌い、実直に技倆の向上を促す、禁欲的な職人像があった。

## 貧民像

横山は、困窮する貧民の境遇に同情的であった。その困窮の多くは、「不運」にあると考えた。「讀者よ、貧民を見て一に懶惰の爲めとのみいふべからず、一と度身を貧民の群に陥れば、不如意の事情は日済を誘ひ酒に魅せられ、一年平和の境涯に出づることを得ざるなり、又た憐むべきにあらずや」(横山、別巻一、四九)。他方で、横山は、貧民の乱雑な生活態度を批判した。「那処の貧民部落と雖も苛酷に其の住民を見れば不規則乱雑を極め皮相より言へば日常の不規則不取締なるが則ち渠等を生涯貧民で居らしむる者とも言ふべく見ゆる」(横山、二巻、四二)。そのため、行政による貧民窟・木賃宿街(以下貧民街)の改善事業を歓迎した。貧民は、勤勉・自立の倫理を以て、社会に包摂すべき人々であった<sup>11)</sup>。他方で、懶惰・依存・不潔の人々を拒絶した。そこに「浮浪者」がいた。

横山の「都市下層社会」には、都市住人の大半が含まれた。明治～大正期の都市は、貧民都市であった。「東京市十五区、戸数二十九万八千、現住人口百三十六万余、其の十分の幾分は中流以上にして、即ち生活に苦混ざる人生の順境に在るものなるべしと雖、多数は生活に如意ならざる下層の階級に属す」(ルビは引用者)(横山、別巻一、二五)。しかし貧民の大半は、勤勉・自立の人々であり、いずれ困窮を脱し、貧民街を出て労働者や市民になる人々であった。

下層社会の下層には、人力車夫・立ん坊・屑拾いがいた。「抑も人力車夫なるものは西洋人などより見れば人類を落として牛馬に致し靈長の高を以て甘んじて奴隷の役に服する、社会あらゆる職業の中最も下賤なる職業なり」(横山、一巻、一一一)。「日稼人足中最も劣等にして、常に車力人足に附属する惰民あり、立ん坊是なり。(中略)如何なる窮民と雖、身体を胖うする家屋あり、然れども立ん坊には家屋なし」(横山、三六)。「社会の上より境遇の上より其職業の上よりして最下層の貧民はと言ふもの有らば余輩はサシヅメ此屑拾を以て則ち極窮民となすものなり」(横山、一巻、一四七)。

人力車夫・立ん坊・屑拾いには、非「浮浪者」も「浮浪者」もいた。特定の場所に屋根と生活がある人は、非「浮浪者」であった。換言すれば、「浮浪者」は、屋根も生活もない、人力車夫・立ん坊・屑拾いの、さらに下層の人々であった<sup>12)</sup>。大阪市社会部によれば、「浮浪者」の路上の業態には、「拾ひ、日傭仲士、乞食、荷車先輓、八百屋、行商、手傳、雑役夫、砥屋、人夫、書家」があった(近現代資料刊行会、一九九六、一九巻、一五八)。ただし、「路上生活者」のすべてが「浮浪者」ではない。前者は、新聞売子や人力車夫等を含む路上で働く人々の全体を指す。「今や新聞売子を以て路上生活者の一に数えらるべく世は進みぬ」(横山、一巻、七三)。つまり、横山の貧民理解は、次のようになる。貧民の中心に職人がいて、その下層に新聞売子・人力車夫がいて、その下層に立ん坊・屑拾がいて、その下層に、屋根と生活をもたず、路上で寝起きする人々がいた。この最後の非定住者が「浮浪者」であり、その多くは、乞食で糊口を凌ぐ人々であった。そのような「浮浪者」は、「下層社会」の周縁または外部の人々であった。これが、横山の下層社会の階層認識であった。横山は、ところどころで「浮浪者」に言及したが、「浮浪者」の定義は行わなかった。「浮浪者」の実体は、曖昧なままであった。そこに、「浮浪者」の

語がもつ特別の機能がある。「浮浪者」は、課税・兵役が叶わない非定住の「非」国民であり、そこには残余の人々が包括された<sup>13)</sup>。このような国民主義のイデオロギーが、横山にあったと思われる。

## (二)「浮浪者」像

東京市は、明治初期より「浮浪者」調査を行った。そして、「重軽症の罹病者」と「健康者」を分類し、前者を救済施設に収容し、「健康者」を請負者の元で就労させた。このような「浮浪者」施策は、「浮浪者」を掌握し、公共空間を管理し、秩序を図るだけのものではなかった。それは、「浮浪者」を「危険な」他者とする（貧民を含む）国民の眼差しへの、行政の応答でもあった。「権力による『乞食狩り』とともに注目すべきは、民衆自身の町村規約による排除の動きである」（今西、一九九八、九五）。「懶惰」「依存」の人々を「危険な」他者とする眼差しは、行政と民衆の双方を捉えていた。それは、都市の近代化が進むにつれ強まった。貧民と「浮浪者」は、階層として隣接する関係にあった。貧民の下層は、何かあれば忽ち「浮浪者」になった。同時に、貧民の観念において、「浮浪者」は、彼彼女らと厳格に異なる人々であった。貧民は、困窮するがゆえに、その眼差しが強かった。

民衆の「浮浪者」への眼差しは、二つの方向を取った（青木、二〇一〇、四八～五一）。一方に、「浮浪者」を蔑む眼差しがあった。「浮浪者」には、人間のあらゆる負の価値が託された。（成人男性の）「浮浪者」は、「落伍者」「怠け者」「犯罪者」と見做された。民衆は、そのような他者を創出し、貶め、排除して、自らの優位と安定を確認した。他方に、子ども、老人、女性、障害者等の「浮浪者」を憐れむ眼差しがあった。彼彼女らは、怠惰ゆえに「浮浪者」になったのではなく、「不運」「不遇」ゆえに「浮浪者」になった、ゆえに、社会は彼彼女らを救済し、保護すべきものとされた。ここでも民衆は、弱者を創出し、憐れみ、包摂して、自らの優位と安定を確認した。こうして「浮浪者」は、他者として、分類され（「良い浮浪者」と「悪い浮浪者」）、丸ごと都市の外部へ放逐された<sup>14)</sup>。

このような「浮浪者」像は、横山ではどうであったのか。貧民（職人）と貧民下層（人力車夫・立ん坊・屑拾い）と「浮浪者」は、境界を接し、階層的に繋がっていた。横山が、このような階層区分にどれほど自覚的であったかは、不明である。当時の東京市に一三〇万人余の貧民がいて（『日本之下層社会』）、千名に満たない「浮浪者」がいた（東京市社会局）。しかし、それでも「浮浪者」は、浮き立つ社会的存在であった。包摂すべき貧民と、放逐・隠蔽すべき「浮浪者」。これが、行政と民衆の認識構図であった。そしてそれは、横山のものでもあった。横山の「浮浪者」像は、刻苦勉励する職人・貧民像を反転したものであった。「浮浪者」は、懶惰・依存の人々であり、「一種のイクチナシ」（横山、別巻一、三六）であった。

渠等は一日の衣食、むしろ数十分後に迫る糊口に差し<sup>つひ</sup>悶<sup>い</sup>へ居る身を以て尚労働を<sup>いと</sup>厭ひ、陽光を背に受け<sup>しらみ</sup>虱をいぢりながら日を送るを智となすが如し、されば渠等にして時に常傭に出づることあるも、二時間以上労働を忍ぶものなく、自ら退きて一日を<sup>くうくわ</sup>空過<sup>おほ</sup>し了る、既に懶惰に身をくづし労働に堪ゆる能はざるなり。（中略）多くは放蕩の経歴を備へ、<sup>ばいどく</sup>黴毒に感染し居らざるは少なし、或は境遇の激変

に遇ひ、墮落して此の群に入りたるもあり」(横山、別巻一、三六～三七)。「屑拾に盗人根性なきは少なく、其の大半はカツバラヒの者流なり」(横山、別巻一、四〇)。

横山は、「誰よりも弱者のために生き、労働問題の解決をもって一生の仕事として止まなかった」(立花、二〇〇八、一三)。その横山の「浮浪者」像に、驚きを禁じ得ない。右の文章に、横山の「浮浪者(乞食)」像が集約されている。立ん坊は惰民であり、屑拾いは盗人も同然である。その先に、さらに身を崩した乞食の「浮浪者」がいる。彼彼女らはすべて、怠惰で(「労働を厭ひ」、依存癖があり(「懶惰に身をくづし」、不潔で(「虱」「黴毒」、危険な(盗人根性))な「落伍者」(「墮落して」)・「怠け者」・「犯罪者」(「カツバラヒ」)である<sup>15)</sup>。

他方で、横山に「浮浪者」を憐れむ眼差しもあった。憐れみの対象は、貧民から始まった。「偶然の事情の為に不幸を来し負債生じ」(横山、別巻一、二六五)たもの、「独身にして極貧癱疾不具又は疾病の爲め産業を営む能はざるもの」「老衰し産業を営む能はざるもの」「重傷を被り即時頼るべき所なきもの」「老衰疾病又は不具にして給与するもの他にあらざる者」(横山、一巻、四九～五〇)。横山にとって、これらの人々は、困窮するが懶惰ではなく、生活に奮闘するが不運な人々、働く意思をもつが働けない人々であった。彼彼女らが「浮浪者」になったとしても、それは不遇・不運というものである。そのような人々は、救済に値する「良い浮浪者」である。・・・横山の著作に、「良い浮浪者」「悪い浮浪者」を分ける記述はない。不遇・不運な「浮浪者」を直接に憐れむ記述もない。しかし、貧民を憐れむ眼差しは、容易に「良い浮浪者」へ延長される。横山にとって、その人々は、社会と運命の犠牲者だからである。

そもそも横山の著作に、「浮浪者」を個別に論じた文章がない。「浮浪者」は、つねに職人・貧民を論じるための「影」であった。「浮浪者」は、職人・貧民をたしなめ、励ますために現れた。職人・貧民は社会内部の人であり、「浮浪者」は外部の人である。だからこそ、「浮浪者」は鮮明な他者(危険な価値の逸脱者)でなければならない。そしてその上で、「悪い浮浪者」は、「良い浮浪者」とともに現れる。そして後者を包摂し、前者を排除する。その包摂と排除は双生児である。横山の職人・貧民像から、このような鏡のなかの「浮浪者」が見えてくる。

#### 四 二つの研究系譜

「浮浪者」を眼差す視座には、客体化する視座と主体化する視座があった(ある)。客体化とは、「浮浪者」の他者化、つまり、「浮浪者」を「私(たち)」の世界の外にある人々と見做す視座をいう。「浮浪者」は、怠惰で危険で、尊厳感情をもたない人々である。「浮浪者」の過酷な境遇は、すべて自業自得である。「浮浪者」は、自立心をもたず、どうにでも処遇可能な人々である。これが、その「浮浪者」像である。

これに対して、主体化とは、「浮浪者」の同類化、つまり、「浮浪者」を「私(たち)」の世界の内にある人々と見做す視座をいう。「浮浪者」は、尊厳感情をもち、幸せを願って日々奮闘する人々である。「浮



浪者」の過酷な境遇は、「私（たち）」の社会が課したものである。ゆえにそれは、「私（たち）」の責任である。これが、その「浮浪者」像である。

社会の近代化のなかで、「浮浪者」は、圧倒的な客体化の眼差しに曝されてきた（いる）。しかしそのなかで、「浮浪者」の世界に入り、そこで人間と交わり、「浮浪者」の境遇を社会の問題、さらに「私（たち）」の責任と考える人々もいた（いる）。

### （一）「浮浪者」の客体化

横山は、模範的な国民主義者であった。国民主義者は、対外膨張論者でもあった。横山は、日本の朝鮮併合を喜んだ。「日清戦役以来、否、征韓論破烈以来、否、豊太閤の朝鮮征伐以来、一種の意味を以て彩られてゐた朝鮮問題が、一昨八月下旬を以て全然解決されたのは、我歴史に特筆大書すべき重大事実であるのみならず、朝鮮及び朝鮮人自身に取つても、李朝建設以来の一大変革であつた」（横山、五巻、三九八）。このような横山について、立花雄一は、次のように書いた。「横山源之助は日露戦争をなかばやむをえざるものとして認め、その刈り取られた帝国主義的果実をも追認している。とくに朝鮮半島支配に対する理解において、ほとんど帝国主義者と変るところがなかった。そこらが最大のアキレス腱であろうか」（傍点は引用者）（立花、二〇〇五、五〇八）<sup>16)</sup>。国民主義者・横山については、別稿で論じたい。横山のアキレス腱は、もう一つあった。それは、彼が都市下層社会から「浮浪者」を排除したことである。横山は、「怠惰」「依存」の「浮浪者」を、貧民に「勤勉」「自立」を促す反面教師として動員した。また横山は、海外殖民を、貧民救済の方途として構想した。海外殖民は、帝国の拡大であり、貧民の移殖である。「浮浪者」の階層的放逐と貧民の空間的放逐。国民主義者・横山も、それを追認する一人であった。

横山以後、時代は彼の予言通りに進んだ。工業化・近代化とともに、下層社会は変容した（中川、二〇〇七、二〇四～二一三）。貧民は、「方面委員」の援助のもと、「貧困者」として救護法の対象になった。貧民街は、「スラム」クリアランスの対象になった。都市の貧困は、集落から個人へ、異質から同質へ、具体から抽象へ、可視から不可視へ変容した。貧民調査は、「要保護世帯調査」「不良住宅地区調査」になった。『日本之下層社会』の関心と方法は、『職事情』へ、東京市社会局（及び大阪市社会部）の調査報告書、さらに『日本社会政策史』（風早、一九四〇）へ継承された。

このなかで「浮浪者」問題は、二つの道を辿った。一つ、貧民が階層分化し、その多くが「中流」になり、一部が「貧困層」になり、最後に「浮浪者」が残った。そして、前二者が市民になり、「浮浪者」との間隙を広げていった。「浮浪者」は、遠くて不可視の少数者になった。そして、貧民に勤勉を説く反面教師の役を降りた。二つ、不可視の「浮浪者」は、正体不明の「危険な」存在である。ゆえに、危険を回避し、道徳的秩序を守るには、「浮浪者」の正体を、明かさなければならない。こうして、数々の「浮浪者」調査が行われた。「浮浪者」像が「実証的に」明かされ、「浮浪者」の根絶（完全な不可視化）の方途が模索された。

戦後の都市下層社会研究も、全体としてその系譜にあった。その優れた著作群において、都市最下層の「浮浪者」の構造的位罫は分析されたが、「浮浪者」を他者と眼差す視座は、据え置かれた（津田、

一九七二）、（江口他、一九七九）、（中川、一九八五）、（布川、一九九三）、（小林、二〇〇一）、（安保、二〇〇七）。社会病理学は、釜ヶ崎ドヤ街の研究において、日雇労働者を「偏倚した病理的存在」と見做し、その極点に「浮浪者」を据えた（大橋、一九六六、二二）。都市下層社会研究において、「浮浪者」は、都市周縁の、都市住人に「眼差される客体」に留まった。「近代社会とは乞食の住めない社会であり、その意味でも『鉄の檻』であった」（今西、一九九八、九六）。研究も「鉄の檻」であった。

## （二）「浮浪者」の主体化

しかし、ルポや研究の世界は、やや複雑であった。そこに、「浮浪者」を人間主体と眼差すルポや研究もあった。まず、都市下層社会論の構造的反転、つまり、「浮浪者」問題を社会構造の問題へ転換する著作群があった。例えば、東京市社会局の調査報告書には、次のようにあった。「（「浮浪者」問題の解決は、それが一引用者）社会自体に内在する缺陷によるものとして社会一般から積極的に關心さるゝや否やにかゝつてある。然るに従来浮浪者に關する一般の見解は其の發制も存續も彼等の怠惰放蕩及至無能の結果であるか然らずんば彼等の宿命的缺陷に基くものとし殆んど無關心に放任されてきた。故に浮浪の現象はあつても浮浪者問題はおこらず、浮浪者問題はおこつてもそれが社会問題とはならなかつた」（傍点は引用者）（東京市社会局、一九三一、六五）。人々が「浮浪者」になる原因は、個人にではなく社会にある。調査報告は、「浮浪者」をこのように捉え、その存在を社会問題とした。そこに、社会問題の構築過程への洞察もあった。実際、「浮浪者」問題は、「浮浪者」が増える度に（「浮浪者」は明治初期、松方デフレ期、世界恐慌期に増えた）、重要な政策課題になった。一九二〇年代、東京市社会局や大阪市社会局、内務省社会局は、「浮浪者」の人口特性、出自、職歴、生活様式を調査した（近現代資料刊行会、一九九五、一九九六）。これら行政機関は、ジャーナリズム等から知識人（例えば草間八十雄）を招いた。彼らは、世界の「浮浪者」問題に通じ<sup>17)</sup>、また、「浮浪者」の生活実態を調査する技倆をもっていた。その調査の目的は、「浮浪者」施策の基礎資料を得ることであった。彼らは、「浮浪」は個人の責任ではなく、社会の問題であると考えた。とすれば「浮浪者」は、「怠惰」「依存」の人々ではないことになる。しかし彼らは、「浮浪者」世界の内部には踏み込まなかつた。「浮浪者」の生活実態は解明したが、「浮浪者」は、施策の対象として、客体化されたままであった。

次に、都市下層社会論の意味的反転があった。そこに、「浮浪者」を人間主体と捉える視座が現れた。「浮浪者」への負の眼差しが転倒された。まず、早くは一九世紀末より、「浮浪者」（乞食）の出自・仕事・生活・意味世界の实態ルポがあった（草間、一九二七）（石角、一九二九）（礪川、一九九七）。それらも、「浮浪者」を異界の人々と見做していた。しかし、「浮浪者」の世界に入り、「浮浪者」の生存戦略と路上の知恵と工夫を活写した。その観察は、「浮浪者」の喜怒哀楽まで及んだ。そこで、「乞食」が生き生きと蘇った。その結果、「浮浪者」を客体化する視座は、実質的に無化された。その「浮浪者」像は、横山のそれと対極のものであった。徹底した「浮浪者」観察は、「浮浪者」のなかに人間を発見した。

戦後も、視座を反転する研究の系譜は続いた。もとより「浮浪者」は、「寄せ場労働者」「野宿者」では

ない。存在形態も析出背景も異なる。しかし最下層の人々を排除し、その上で「良い」「悪い」に分類する眼差しの構造は、通歴史的であった。本稿の関心は、この点にある。仲村祥一と小関三平は、社会の周縁にある人々を客体化する社会病理学の視座を批判し、そのなかで、釜ヶ崎労働者を構造的主体（構造を生きる主体）と位置づけた（仲村、一九六七）（小関、一九六八）。筆者がそれに続いた（青木、一九八九）。そこで、寄せ場労働者の差別・生活・意味世界を分析し、彼らを〈ミジメ〉と〈ホコリ〉の間で揺れる人間主体と捉えた。同様の視座は、野宿者（ホームレス）世界の研究にも現れた。そこで、野宿者の〈生〉の諸局面に焦点が当てられた。そして、野宿者への眼差しが反転され、支配的規範（勤勉、自立等）の読み替えが行われた。例えば、野宿者の生存戦略について（山口、二〇〇一）、路上の自立について（妻木、二〇〇三）、女性野宿者の〈生〉について（丸山、二〇一三）、野宿者の信仰について（白波瀬、二〇一五）、野宿者支援について（山北、二〇一〇）等がある。それらの研究を括るキーワードは、「都市下層」である。西澤晃彦は、寄せ場労働者・野宿者を分類、治療、無効化し、都市社会の「隠蔽された外部」に幽閉する言説と施策の暴力性を批判した（西澤、一九九五）。ここで〈都市下層〉とは、収奪され、排除され、眼差しの暴力に屈し、そして抗い、そのように〈生〉を営む主体（寄せ場労働者・野宿者）を指す、実存的な階層概念としてある。それは、都市に排除され、包摂される客体（「労務者」「浮浪者」「収容者」としての無機質な〈都市下層社会〉）の概念とは異なる。

このように、「浮浪者」概念の反転は、すでに横山の時代（明治から大正への移行期）から、戦後を経て現在に至っている。「浮浪者」を沈黙の世界に放置する都市下層社会研究と、「浮浪者」の〈生〉の葛藤に分け入り、その声を聞き、「浮浪者」に苦難を強いる社会を告発する都市下層研究。「浮浪者」（ホームレス）研究は、この二つの系譜が拮抗し、交錯しつつ、現在に至っている。これが、横山の時代とそれ以後の「浮浪者」像の顛末である<sup>18)</sup>。

## 五 「浮浪者」研究の射程

眼差し問題としての「浮浪者」問題は、いつもあった。「乞食のポジションを近代／都市／権力批判の起点となし、もって近代（批判の）都市研究を批判する」（傍点は原文）（青木、二〇一〇、五八）。「乞食のポジション」は、いつも「起点」であり、「常点」であった。中流社会と下層社会の分割、貧民と「浮浪者」の分割、「良い浮浪者」と「悪い浮浪者」の分割。資本主義と近代は、終りなき分割（排除と包摂）を必要とした（している）。「乞食のポジション」は、分割を隠蔽する詐術をラディカルに暴いてきた。「浮浪者」問題は、資本主義と近代に住まう我々の問題である。「浮浪者」とともにありたい。そのためは、我々の眼差しを省察しなければならない。これが、都市下層研究の前提である。現代日本で、野宿者は、就労を拒絶され、空間を排除され、福祉で「最終処理」されている。野宿者に寄り添い、労わるように、優しい言説が溢れている。それは、野宿者の幸せなのか、その偽装なのか。野宿者は、路上から消えて、その〈生〉は、蘇ったのか、「廃棄された」（Bauman, 2004=2007）のか。我々は、たえずこう問われている。いかなる騙しも騙されも、免罪されない。

近代を排除された「浮浪者」を研究の中心に置くことで、何が見えるのか。まず、「排除される側」の人間が見える。次に、その人々を見てこそ、都市の全体が見える。逆に、その人々を外した都市研究の偏りが見える。それは、既存の都市研究の読み替えを迫る。筆者は、本稿に続く「浮浪者」研究の三つの課題を設定する。一つ、「浮浪者」の階層的出自（「伝統型乞食」から「近代型乞食」へ）、及び「浮浪者」とその他の都市下層の関係を分析すること<sup>19)</sup>。以て、「浮浪者」を析出し、「浮浪者」とその他の都市下層を分割する近代都市の構造を明らかにする。二つ、「浮浪者」への眼差しを分析すること。とくに法・布達の「浮浪者」取締り規則について。以て、眼差しと権力、「浮浪者」排除の微視的諸相を明らかにする。三つ、「浮浪者」の意味世界を分析すること。以て、近代の暴力に屈し、また抗う人間「浮浪者」の像が浮き彫りになる。それは、眼差しの意味解釈の基点となる。…いずれも、本稿の主題を深め、近代の都市像と人間像を豊穡にする堡壘をなす。いずれも、今日の野宿者研究に通底する。用いる材料は、東京市や大阪市の「浮浪者」調査報告や新聞記事、草間八十雄や石角春之助、礪川全次らの「浮浪者」ルポ等である。

#### [注]

- 1) 「浮浪者」は、現在は差別語とされている。本稿では括弧つきで用いる。
- 2) 横山の著作からの引用は、すべて『横山源之助全集』に依る。紙幅節約のため、引用注記は、原論文の執筆年と標題を省いて（横山、巻数、頁）とする。横山は、長年に亘り下層社会を観察したが（「貧街十五年間の移動」、四巻、三九四～四〇三）、その眼差しは、ほぼ不変であった。ゆえに、執筆年の前後関係は横に置く。
- 3) 『藝備日日新聞』は、明治一五年に広島で創刊され、大正元年に二万部発行して、昭和一六年に廃刊された。前田は、その主幹であった。
- 4) 横山が生きた時代は、明治末年から大正初めの、新社会への転換期であった。横山の著作は、その投影であった。「江戸時代以来の旧社会層と、産業革命によって創出されつつあった近代社会層が混在する過渡期の、一大庶民状態史であった。（横山の著作は一引用者）文字どおり、“日本の下層社会”をほぼ網羅していた」（立花、二〇一五、一四八、傍点は引用者）。
- 5) 隅谷三喜男は、明治期の都市下層社会の下層職種を「都市雑業」と呼んだ（隅谷、一九六七、六三～六六）。その後、「雑業」の語に異議が出ている。「都市下層職種」と呼べばいいか、国際労働機関（ILO）に倣って、「都市インフォーマル職種」（informal work）と呼べばいいか。
- 6) 明治期の都市下層社会ルポの紹介と解説は、（立花、一九八一）に詳しい。本稿は、その他（立花、一九七九、二〇〇五）（中川、一九九四、二〇〇七）等を参照した。
- 7) 『中國新聞』は、明治二五年に広島で創刊され、大正五年に一万部発行した。『藝備日日新聞』廃刊後、代表的な地方紙として、今日に至っている。
- 8) 「浮浪者」対策の基本は、「浮浪者」を取り締り、郷里へ送還し、生家の戸籍に編入することであった。
- 9) 横山は、労働現場の現実主義を尊び、幸徳秋水等の理想主義的な運動を嫌い、改良主義的

な運動を選択した。

- 10) 一九一二年、横山は、殖民事情調査のためブラジルへ渡った。「横山が殖民問題に後半生をかけた理由は、閉塞した労働運動——つまりは社会・労働問題の解決が国内的に行き詰った、その打開策としてであった」（立花、二〇一五、四二〇）。
- 11) 横山は、大商人のイトスを称賛した。「特に質素と、勤儉と、且つ模倣すべからざる機智と功慧とを以て地歩を据えてゐるは、一種の光景である。（中略）看よ、手腕を以て称せられ、才物を以て呼ばれてゐる輩は、皆な丁稚上りである。老輩のみならず、中老者のみならず、新進の青年者の如き、皆な左様である」（横山、六巻、三一九）横山は、そこに成功する貧民の将来像を見た。
- 12) 横山の著作に「浮浪者」の語はないが、「浮浪人」の語はある。浮浪人とは、「生計の方針を一定の職業に置かずして常に風塵の間に彷徨する者」（横山、四巻、二六～二七）をいう。横山の浮浪人は、一部に貧民と「浮浪者」を含む、階級横断的な人々であった。
- 13) 行政官僚・警察・学者は、多種多様で雑多な人々を「健全な労働者」へ包含し、知と技術を動員して、社会と空間の編成を行った（永橋、一九九八、四三七）。その分類という機能的配置に収まらない人々が、「浮浪者」カテゴリーで括られた。
- 14) 「浮浪者」への憐憫は、「浮浪者」への不安・恐怖・憎悪を育む。憐憫→不安→恐怖→憎悪の心理過程については、（青木、二〇一一、一三～一四）を参照されたい。
- 15) 大阪市の今宮保護所に、昭和四～六年に五四五人の「浮浪者」が収容されたが、彼彼女らの浮浪の動機・原因は、家計困難一一二人、疾病九二人、怠慢放蕩七九人、失業二八人、不具二一人、老衰一五人、事業失敗七人、両親死亡三人、精神病九人、不詳一七九人であった（計五四五人）（近現代資料集成、一九九六、二六巻、一八九）。「怠慢放蕩」が原因で「浮浪者」になった人は、全体の二四・五パーセントであった。「怠慢放蕩」の中身も検討を要するが、「浮浪者」の大半は、怠慢放蕩とは無縁であった。
- 16) 「（横山は一引用者）北は樺太から、南は台湾、西は朝鮮まで、聖天子の日章旗がはためくのめめでたく祝し、大逆事件被告人の死刑執行に死者を鞭うつことがあっても、日本帝国の内外政のありかたにたいしては一片の疑問も批判もくわえていなかった」（立花、二〇一五、三六九）。立花は、庶民の目線で日清戦争を批判した横山が、労働運動、改良主義路線、海外殖民論を経て日露戦争の擁護に至る、立場の変化の軌跡を追った（立花、二〇一五）。
- 17) 東京市社会局の調査チームは、シカゴ学派の人間生態学に学び、ホボ（hobo）を調査したネルス・アンダーソンの著作を抄訳した（Anderson, 1923=1930）。
- 18) 「浮浪者」を主体化する研究が、明治期のルポや戦後の研究に「なぜ」現れたのか。その背景事情は、時代の社会動向や研究動向により異なる。その解明は次稿に譲る。なおマルクス主義は、たいていの場合、「浮浪者」を客体化する研究に組みしてきた。
- 19) 横山は、何ヶ所かで被差別部落民（「新平民」）の困窮に言及した（横山、二巻、三七、三二九／三巻、一八五／五巻、二六）。布川弘（一九九三）、小林丈広（二〇〇一）、安保則夫（二〇〇七）も、都市下層社会論のなかで被差別部落を分析した。被差別部落民は、都市下層に閉じ込められた（青木、一九九七）。被差別部落民と「浮浪者」の関係は複雑である。そこ

に、屈折した排除の構造が見える。

## [文献]

Anderson, Nels, 1923, *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, Chicago: University of Chicago Press (=一九三〇年、「ホボ——無宿者に關する社會学的研究」、『東京市社會局調査報告書』、三一巻、東京市社會局、『日本近代都市社会調査資料集成』、一、近現代資料刊行会、SBB 出版会)。

青木秀男、一九八九年、『寄せ場労働者の生と死』、明石書店。

——、一九九七年、「近代と都市部落——広島市 A 町を事例として」、『部落解放研究』広島部落解放研究所、三号、五六～七七頁。

——、二〇一〇年、「排除する近代——大正期広島の乞食世界」、『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』、青木編著、ミネルヴァ書房、三三～六二頁。

——、二〇一一年、「戦地に潰えた『東亜協同体』——日本兵の感情構造」、『わだつみのこえ』日本戦没学生記念会、一三五号、四～二四頁。

安保則夫、二〇〇七年、『近代日本の社会的差別形成史の研究』、ひょうご部落解放研究・人権研究所編、明石書店。

石角春之助、一九二九年、「乞食裏譚」、『流民』(近代民衆の記録四)、林英雄編、新人物往来社、一九七一年、三二八～三九五頁。

今西一、一九九八年、『近代日本の差別と性文化——文明開化と民衆世界』、雄山閣。

Weber, Max, 1905, *Die protestantische Etik und der Geist des Kapitalismus*, Bd.2, Tübingen, (=一九六二年、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』下巻 梶山カ・大塚久雄訳、岩波書店)。

江口英一・西岡幸泰・加藤佑治、一九七九年、『山谷——失業の現代的意味』、未來社。

大橋薫、一九六六年、「社会病理(地域病理)現象としてのスラムとドヤ」、『都市問題研究』、一八巻二号 一六～二八頁。

風早八十二、一九四〇年、『日本社会政策史』、日本評論社。

近現代資料刊行会、一九九五年、『東京市社会局調査報告書』、日本近代都市社会調査資料集成。

——、一九九六年、『大阪社会部調査報告書』、日本近代都市社会調査資料集成。

草間八十雄、一九二七年、「上編 浮浪者の實情」、『近代下層民衆生活誌』(一 貧民街)、磯村栄一編、明石書店、一九八七年、二七～八四頁。

礪川全次、一九九七年、「資料編」『浮浪と乞食の民俗学』、批評社、三一～四三三頁。

小関三平、一九六八年、『社会病理学と都市底辺』、汐文社。

小林丈広、二〇〇一年、『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み』、雄山閣出版。

桜田文吾、一八九〇年、『貧天地饑寒窟探検記』、日本新聞社。

白波瀬達也、二〇一五年、『宗教の社会貢献を問い直す——ホームレス支援の現場から』、ナカニシヤ

出版。

隅谷三喜男、一九六七年、『日本の労働問題』東京大学出版会。

立花雄一、一九七九年、『評伝 横山源之助——底辺社会・文学・労働運動』、創樹社。

——、一九八一年、『明治下層記録文学』、創樹社。

——、二〇〇五、「解題」、『横山源之助全集』二、五、七巻、立花雄一編、社会思想社。

——、二〇〇八年、「労働運動の夜明に——労働者状態論争と横山源之助」『大原社会問題研究所雑誌』大原社会問題研究所、五九六号、一～一四頁。

立花雄一、二〇一五年、『横山源之助伝——下層社会からの叫び声』、日本経済評論社。

著者不詳、一八九六年、「東京の貧民」、『明治東京下層生活誌』、中川清編、岩波文庫、一九九四年、九〇～一五三頁。

津田真澄、一九七二年、澁『日本の都市下層社会』ミネルヴァ書房。

妻木進吾、二〇〇三年、「野宿生活——『社会生活の拒否』という選択」『ソシオロジ』、社会学研究会、四八巻一号、二一～三七頁。

東京市社会局、一九二三年（一）、「浮浪者及残食物に関する調査」、『東京市社会局調査報告書』七巻、『日本近代都市社会調査資料集成』、一巻、近現代資料刊行会、SBB 出版会、一九九五年、一六七～二三七頁。

——、一九二三年（二）、「浮浪者に関する歴史的考察」、『東京市社会局調査報告書』、七巻、『日本近代都市社会調査資料集成』、近現代資料刊行会、SBB 出版会、一九九五、一巻、二三九～二三七頁。

——、一九二九年、「浮浪者に関する調査」、『東京市社会局調査報告書』、二一巻、『日本近代都市社会調査資料集成』、近現代資料刊行会、SBB 出版会、一九九五、一巻、一四九～二四二頁。

——、一九三一年、「浮浪者の種々相」、『東京市・府社会局調査報告書』、三五巻、『日本近代都市社会調査資料集成』、近現代資料刊行会、SBB 出版会、一九九五年、一巻、一四一～二一九頁。

——、一九三九年、「市内浮浪者調査」、『東京市社会局調査報告書』、六三巻、日本近代都市社会調査資料集成一、近現代資料刊行会、SBB 出版会、一九九五年、九～一四五頁。

戸田貞三、一九三三年、『社会調査』、時潮社。

中川清、一九八五年、『日本の都市下層』、勁草書房。

——、一九九四年、「解説」、『明治東京下層生活誌』、中川清編、岩波文庫、二九三～三〇九頁。

——、二〇〇七年、「都市下層の生活構造と社会的位置の変容——近現代の日本における貧困の性格変化」、『都市下層の生活構造と移動ネットワーク——ジャカルタ、東京、大阪、サン・クリストバルのフィールドワークによる実証』、倉沢愛子編著、明石書店、一七一～二四六頁。

永橋為介、一九九八年、「一九一〇代の都市大阪を事例とした『浮浪者』言説の構造」『ランドスケープ研究』日本造園学会 六一巻五号 四三三～四三八頁。

仲村祥一、一九六七年、『社会体制の病理学』、汐文社。

西澤晃彦、一九九五年、『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィー』、彩流社。

西田長寿、一八八六年、「東京府下貧民の眞況」、『朝野新聞』。

Bauman, Zygmunt, 2004, *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts*, Polity Press  
(=二〇〇七年、『廃棄された生——モダニティとその追放者』、中島道男訳、昭和堂)。

布川弘、一九九三年、『神戸における都市「下層社会」の形成と構造』、兵庫部落問題研究所。

松原岩五郎、一八九三年、『最暗黒之東京』、民友社。

丸山里美、二〇一三年、『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』、世界思想社。

森田思軒、一八八五年、『地方惨状観察員報告』、出版社不詳。

山北輝裕、二〇一〇年、「野宿者と支援者の協働——「見守り」の懊悩の超克に向けて」、『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』、青木編著、ミネルヴァ書房、二六に～二八四頁。

山口恵子、二〇〇一年、「野宿者の生き抜き戦略——野宿者間の相互作用を中心として」、『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』（平成七年度～八年度文部省科学研究費補助金総合研究（A）成果報告書）、田巻松雄代表、一〇七～一二五頁。

横山源之助、二〇〇〇～二〇〇七年、『横山源之助全集』一～九巻、別巻一～二、立花雄一編、社会思想社。

\* 本稿は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B、課題番号二六三〇一〇二九、二〇一四～一六年）に基づく研究成果の一部をなす。